

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：22301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01542

研究課題名（和文）腐敗・汚職の経済理論モデルの構築 - 経済厚生からのアプローチ

研究課題名（英文）The theoretical model of Corruption from economic welfare approach

研究代表者

溝口 哲郎（Mizoguchi, Tetsuro）

高崎経済大学・経済学部・教授

研究者番号：40566890

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、腐敗と縁故主義の関係について、縁故主義がなぜ腐敗につながるのか、そのメカニズムについて分析を行った。縁故主義の問題は日本を含め世界中で、問題視されており、腐敗などの弊害をもたらすケースが多々ある。そのため、縁故主義がもたらす問題について、腐敗とどのような関係があるのか、経済厚生の観点を含めた上で、腐敗と縁故主義の問題に関する分析を行った。縁故主義を中心にした組織運用が行われる弊害について、昨今の事案を踏まえた事案も整理して、その防止策についても提言を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中央公論で発表した研究については、朝日新聞耕論（朝刊15頁）目に「腐敗の温床 弊害の可視化」というインタビュー記事を掲載。腐敗と縁故主義の問題について、学術的な立場から一般向けに分かりやすく説明した。同時にWEB版の掲載があり、「岸田首相の身内びいき 経済学者が語る「縁故主義」と民主主義の危機」という形で、縁故主義がもたらす不公正社会の問題と腐敗がどのような帰結をもたらすのかを詳しく説明している。

また政府部門の失敗と腐敗の問題については、腐敗が資源配分をゆがめ、社会全体に断絶をもたらす弊害についてより理解を深めてもらうために、専門文献の翻訳を通じて社会的意義を発信する予定である。

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyzed the relationship between corruption and cronyism, and the mechanism of why cronyism leads to corruption. The problem of cronyism has been viewed as a problem throughout the world, including Japan, and in many cases it leads to corruption and other harmful effects. Therefore, we analyzed the problems caused by cronyism and how they are related to corruption, including the perspective of economic welfare, and then analyzed the problems of corruption and cronyism. Regarding the harmful effects of organizational operations centered on cronyism, we also organized cases based on recent cases and made recommendations on how to prevent them.

研究分野：経済学

キーワード：腐敗 縁故主義 汚職 賄賂

1. 研究開始当初の背景

腐敗・汚職は「公から委ねられた権限を個人の利得のために濫用すること」と定義される。つまり官僚などの公人が、裁量的に与えられた権限を最大限利用して、賄賂等の利益を得ることである。腐敗・汚職が問題視される理由は、国家のビジネスに参入した個人や企業が、権限を持つ官僚や政治家に対して賄賂などの見返りを提供することによって、資源配分に歪みをもたらし、資源配分の効率性を損ねてしまうことにある (Shleifer and Vishny (1993), Mizoguchi and Quyen (2012), 溝口 (2010, 2017), 溝口&斎藤 (2017))。その結果、先進国・開発途上国を問わず、社会全体の各種制度を弱体化させる。このことが、腐敗・汚職が社会にもたらす損失である。

過去の腐敗・汚職の研究は、文化や慣習など各国固有の事例に注目したケーススタディが中心であった。特に経済援助の有効性の観点からみて、腐敗・汚職は経済発展を阻害し、援助の効果を損ねる。そのため世界銀行などの国際機関や、腐敗・汚職防止の国際的な NGO であるトランスペアレンシー・インターナショナルが中心になって、腐敗・汚職の防止策が提言されている。これらの国際機関や NGO は腐敗・汚職防止の戦略として、腐敗・汚職の実証分析の基礎となる統計データの整備や作成を行い、実際の政策評価に反映している。そして実証分析の結果と組み合わせ、経済理論モデルを応用した腐敗・汚職の規範的な分析が増加している (Rose-Ackerman ed (2006), Rose-Ackerman and Søreide eds (2011))。

腐敗防止等の研究を通じて、腐敗のネットワークという状況に、縁故主義が関連するケースが多々ある。縁故主義とは、「政治家あるいは官僚とビジネスエリートが共謀し、未知の他人との取引とはまったく異なる別のやり方で利益を得ること」と定義され、閉鎖的で限定された関係者の間のみで富の分配が生じやすくなる傾向がある。その結果、特権エリート階級と一般市民との間で社会の分断が大きくなり、縁故や腐敗によって生み出された社会のルールが法制度を侵食する結果、国家による統治が弱体化する。

2. 研究の目的

本研究は、基盤研究 C (課題番号: #24530201) の研究成果である Mizoguchi and Quyen (2014) や Mizoguchi (2019) の経済理論モデル、そして溝口 (2023) の結果を考慮に入れた、縁故という条件が加わった腐敗・汚職モデルを構築、その経済厚生的帰結を考えることである。

腐敗・汚職は、市場メカニズムとは異なる裁量的なルールによって、金銭等の便益を提供した個人が恩恵を受ける一方で、資源配分の歪みを通じて一国の経済厚生に悪影響を及ぼす。先進国、開発途上国を問わず、腐敗・汚職による政府部門のガバナンスの弱体化は、資源配分を歪め、所得格差による社会の分断化を進行させる。特に開発途上国においては、腐敗した支配者層の一部が国家財産を不正に収奪した結果、国家運営に必要な予算が担保されなくなり、政府が機能せず、一部のアフリカの国々のように内戦に至る最悪のケースもある (UNODC and World Bank (2007), OECD (2015))。特にこの問題は、縁故主義によって腐敗が悪化しているケースもあるため、腐敗問題と縁故の問題は分離できない問題となっている。そのため、本研究では、縁故主義による腐敗の発生のメカニズムの研究を目的とする。具体的には、縁故主義と腐敗の問題として、縁故主義が資本主義体制に対する大きな脅威になっており、縁故を基にした資本主義「縁故資本主義」が社会的格差を広げることにより資本主義および、民主主義の弱体化をもたらしている (Karam (2017))。そこで縁故資本主義による腐敗を防ぐために、どのような防止策が考えられるのかも含めて分析する。

3. 研究の方法

縁故主義がどのように腐敗につながるのか、そのメカニズムを分析する。縁故主義から発生した腐敗を分析するための経済理論モデルの開発にある。縁故主義は学閥、地縁、血縁など様々な形態で存在しており、これら縁故主義がもたらす腐敗などの弊害についての評価および防止策に関して、近代経済学の枠組みから縁故主義を伴った腐敗の分析を行った。

4. 研究成果

本研究では、腐敗と縁故主義の関係について、縁故主義がなぜ腐敗につながるのか、そのメカニズムについて分析を行った。縁故主義の問題は日本を含め世界中で、問題視されており、腐敗などの弊害をもたらすケースが多々ある。そのため、縁故主義がもたらす問題について、腐敗とどのような関係があるのか、経済厚生観点を含めた上で、腐敗と縁故主義の問題に関する分析を行った。縁故主義を中心にした組織運用が行われる弊害について、昨今の事案を踏まえた事案も整理して、その防止策についても提言を行った（その成果の一部は、朝日新聞耕論 2023 年 9 月 22 日（朝刊 15 頁め）に「腐敗の温床 弊害の可視化」という形で結実している。インタビュー記事を拡張したバージョンとしては、「岸田首相の身内びいき 経済学者が語る「縁故主義」と民主主義の危機」（<https://www.asahi.com/articles/ASR9M6RMFR77UPQJ00K.html>）として、掲載された。日本の事例を参考に、縁故主義の弊害について説明し、防止策としてはマスメディアによる政権への癒着を縁故主義と腐敗を防止するために、腐敗防止等の政策提言を踏まえて論文にまとめたのが、中央公論 2023 年 5 月号「縁故主義に囚われる世界」である。ここでは、縁故主義に関する指数と腐敗認識指数を紹介し、人々がどのように縁故主義や腐敗を捉えているのかをデータの紹介し、その防止策についてメディアの役割が重要であることを提言とした。

これまでの研究で明らかになってきたのは、腐敗・汚職は経済効率性を損ね、社会に不平等をもたらし、格差を拡大し、経済厚生を悪化させることがわかっている。本研究はさらに、腐敗の問題をさらに悪化させる問題として、縁故主義とその類型である世襲の問題について、経済学のツールを用いて分析を行った。特に公共部門の腐敗の問題については、政府は決して善意の存在ではなく、ロビイングや人的関係によって縁故が生まれ、その結果一部の人のみが得をする状況が生じてしまう。そのため、市場の失敗ならぬ政府の失敗という状況がなぜ生まれるのかを政治的エージェンシー・モデルを用いて善意の政府を分析する手法を編み出したのが LSE の Besley 教授である。本研究との意義を考え、政府の失敗の問題を理論的に分析した Besley のレクチャーを本にした Principled Agent? の日本語翻訳を行うことに意義があると考え、本研究開始の時期より翻訳を行っている。編集・出版スケジュール等で研究期間中での公表に間に合わなかったが、腐敗と縁故主義の問題を理解する上で重要な一冊に位置付けられる本と考えたため、翻訳を行った。2024 年 8 月ごろに慶應義塾出版会より刊行予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 溝口哲郎	4. 巻 137
2. 論文標題 縁故主義に囚われる世界	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中央公論	6. 最初と最後の頁 160-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 溝口哲郎	4. 巻 -
2. 論文標題 腐敗、ガバナンスの諸問題について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化芸術におけるSDGsウェブページ内	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>研究成果の一般向けの報告活動として以下を行った。</p> <p>2023年9月22日、朝日新聞耕論（朝刊15頁）目に「腐敗の温床 弊害の可視化」というインタビュー記事を掲載。腐敗と縁故主義の問題について、一般向けに分かりやすく問題点を指摘した。同時にWEB版の掲載があり、「岸田首相の身内びいき 経済学者が語る「縁故主義」と民主主義の危機」という形で、紙面では載せられなかったインタビュー記事を拡張版として掲載してもらった。掲載されたURLはこちらとなる (https://www.asahi.com/articles/ASR9M6RMFR77UPQJ00K.html)</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------